

未来視青年とリーズナブル探偵女

第一話『麻婆豆腐が視えたんだ』（初稿）

脚本・海山純平

【登場人物】

空木光斗（からき・みつと）

早坂琴子（はやさか・ことこ）

店主 1

店主 2

男子

女子

客

日本の都会・昼

大勢の人々が行き交っている。談笑する人も。

人混みを避けるような場所で、一人の青年が空を見上げている。

光斗M 「過去と未来、どっちに行きたい？なんて質問に大概の人は、未来を選ぶかもしれない。別にどっちを選ぼうが構わないが、これだけは言える・・・未来を知ったところで、良い事尽くしではない」

光斗「(溜息)」

光斗M 「僕、空木光斗の右目は「未来視」という特殊な眼だ。未来を視ることが出来る。色々条件は多いが。だがそのせいで、僕の人生は「わかりきった日常」だらけで、つまらないものだ。ところで――」

人混みを見る。誰も光斗を見向きもしない。

光斗「はあ、儲からん……。なぜだ？客が来ない。占いに興味が無いのか？この店構えが悪いのか？」

ブルーシートに座り『未来、占います』と書かれた段ボールの看板(?)のみ。

光斗「……うん悪いな。これも要因だな」

琴子「占い師くん、占ってくれないかい？」

日溜まりのような温かさと、トゲを隠し持つ可憐な花のような、独特の雰囲気を持つ女性が現れる。

光斗「ああはい。どれくらい先のを？」

琴子「20分後の未来、私はどうなってる？」

光斗「かなり直近だな！占う必要あるか？」

言いつつ、右目だけで琴子を見つめ、

意識を集中させる。

断片的に未来が視えた。

光斗「：なんか麻婆豆腐食べるぞ。二皿も」

琴子「おおくすごい！丁度これから麻婆豆腐を食べようと思っていたんだ！ちなみに、どんな店で食べてる？」

もう一度右目で見つめる光斗。

光斗「ちよつとぼろい中華料理屋。『中華ネ』という店」

琴子「おお、おお！まさにその店で食べようと思っていたんだ！てっきり、あそこの店を言うのかと思ったけど」

少し離れた場所にある、綺麗な中華料理屋を指さす琴子。

琴子「ふむ。インチキ占い師ではないみたい

だねえ」

じろじろと光斗を見つめる琴子。

耐えられなくなり顔を逸らす光斗。反

応に楽しむ琴子。

琴子「はは。面白い体験をありがとう」

言って、颯爽とその場を去る琴子。

呆然と見送る光斗。少し間を置いて、

光斗「しまった！金払ってない！？」

急いで追いかける光斗。真剣な形相だ。

光斗M「この眼で未来を知ることが出来る。

だがそのせいで、つまらない日常を過ごし

ている。それでも僕は求める：『予想外の

出来事』を！その為にはまず」

光斗「金払えー！ー！！」

光斗 M「予想外の出来事」に遭遇する前に飢え死にしたら台無しだ！：いや、これはこれで既に予想外じゃ：いいや！これはノー！
カンだ！」

同・大通り

ダッシュの末、琴子の後ろ姿を遠くに発見する光斗。

光斗「どっちに行くんだ・・・」

右目で琴子を見る光斗。瞬間、琴子がバイクに轢かれる未来が断片的に視えた。

再び走り出す光斗。

光斗「ちよつとストップ！！」

追いつき、琴子の肩に手を置いて歩みを止めさせる光斗。

直後、曲がり角から猛スピードでバイクが飛び出してきた。

安堵の息を吐く光斗。呆けた顔の琴子だったが、すぐにはっとし振り返る。

その顔は笑顔だった。

琴子「おやおや、これは驚いた。ありがとう、さっきの占い師くん」

光斗「間に合ってよかった。危うく永遠に料

金未払いで終わるところだったよ…」

琴子「ああ、そっか。それはすまなかったね」

光斗の腹が鳴る。

琴子「はは。その空腹は私のせいでもあるね」

光斗「いや、別にこれは…」

琴子「オーケー。助けてもらったお礼に、こは奢らせておくれ。料金もちゃんとはらうからさ」

光斗「……ご馳走になる」

琴子「では、件の中華料理屋に行こうじゃないか」

歩き出す琴子。後に続く光斗。

顔だけ後ろを向く琴子。

琴子「ひよつとして、さっきの占いで、こうなることも分かったのかい？」

光斗「いいや。分かったのは麻婆豆腐と店だけだ。そこまで範囲を広くして視ていない」

言いながら右目だけで視る光斗。

はっとする光斗。

またも琴子の肩に手を置いて、歩みを止める。

琴子「お？今度はなんだい？」

光斗「その場から動かないで、足元を見てくれ……」

言われた通り、足元に目をやる琴子。
マンホールが開いている下水道入口が
あつた。

爽やかな笑顔で振り返る琴子。

琴子「二度も助けられちゃったね。ありがと

う、占い師くん」

光斗「何となく視ておいて正解だったな…。

というか、楽しんでないか？」

琴子「・・・少し、ね」

光斗「毎回は助けられないからな」

琴子「わかったよ、占い師くん。・・・占い師

くんと呼ぶのもあれだね。君、名前は？」

光斗「・・・空木光斗」

琴子「私は早坂琴子」

中華料理屋

テーブル席で向かい合って座る光斗と

琴子。

中年の店主が注文を取りに来る。

店主 1 「ご注文はお決まりですか？」

琴子 「麻婆豆腐を」

店主 1 の目が光斗に向く。

何を注文しようか焦る光斗。

光斗 「えっと、同じのを」

店主 1 「はいよ。少々お待ちください」

厨房に戻る店主 1。厨房には年老いた

店主がいる。

店主 1 「麻婆豆腐二つ」

店主 2 「あいよろ」

調理に取り掛かる二人（店主 1、2）。

光斗 「・・・」

店内を見やる光斗。

店内は清潔だが、所々開店からの年月を感じさせられる。客入りは満席ではないが、席はそこそこ埋まっている。厨房には、老いた店主と先程の中年店主の二人。手元の水の入ったグラスに視線を落とす。

光斗「はあ：人生ってつまらないモノだな」

琴子「あからさまにネガティブな発言だねえ」

光斗「余程のことがない限り、未来視で見た通りなんだ。予想外なんて貴重な代物だ。」

まったく、厄介な眼を持ってしまったよ」

琴子「常時未来が視えてるのかい？」

光斗「いや、突然だ。突然いつの關係なく視えるのが殆どだ」

琴子「私の時は20分後って正確に視れたじゃないか」

光斗「意識して対象を視れば調節できる。ちなみに最長で、四日先まで視れる」

琴子「ふむ。その能力を活かして占い師かあ」

光斗「儲からないけどな・・・」

琴子「はは。そりゃあ君、あんな店構えだと
ねえ」

光斗「・・・ふん」

琴子「明日はどうなってるか、もう視えたの
かい？」

光斗「いや、まだ視えてない。まあ、後で勝
手に視えてしまうだろうな」

店主1「麻婆豆腐おまちどお」

店主1が麻婆豆腐を二皿運んで来、テ
ーブルに置く。再び厨房に戻る
未来視で視た通り、テーブルに麻婆豆
腐が二皿となった。

琴子「はは、なるほどねえ！こういう成り行
きだったかあ。私もなんで二皿なのか疑問
だったんだ」

キョトンとした顔の光斗。

光斗「え、いや、まさか片方は僕のだとは：」

琴子「え？君の未来視、カメラワーク利かな

いのかい？ズームインも？手ブレ補正も？」

光斗「そんな機能ない！僕の眼をなんだと思
ってるんだ！」

琴子「まあまあ。兎に角、食べようじゃない
か」

光斗「・・・いただきます」

麻婆豆腐にがつくが、思ったより熱
く苦戦する。それでも勢いは緩まない。

琴子「そんなにお腹空いてたのかい？」

光斗「ここんどこ、実入りがよくなってな」

琴子「あの店構えだとねえ：おっと二度目だ
ね、はは」

苦虫を噛むような顔で琴子を見る光斗。

再び麻婆豆腐を頬張る。

その様子を微笑ましく見つめる琴子。

光斗「ふう・・・ごちそうさま」

琴子「はいどうぞ。手を付けてないから」

琴子が自分の麻婆豆腐を差し出す。

光斗「…いいのか？」

琴子「助けてくれたお礼だよ。占いの料金も後でちゃんと払うから。ささ、冷める前に」

光斗「それじゃ、ありがたく…」

琴子の麻婆豆腐を頬張る。

琴子「未来が視えてしまう我慢強い君に、ち

よつとしたご褒美も兼ねて、ね」

琴子の急な一言に、手を止める光斗。

目を見開いて、琴子を見る光斗。

琴子「ん？どうかしたかい？」

光斗「・・・いや。なんでも」

食事を再開する光斗。

あそうだ、という様に両手を合わせる

琴子。

琴子「名乗ったけど、名刺を出した方がいい

ね。私はこういう者だよ」

名刺を差し出す琴子。

受け取る光斗。

琴子「おっと、（小声）声には出さないように
ね」

不思議に思いながら目線を名刺にやる

光斗。

『リーズナブル探偵 早坂琴子』と書
かれていた。

怪しむ様な顔で、名刺と琴子を交互に見やる光斗。

微笑んでいる琴子。

琴子「気持ちはわかるよ。でも、今は詳しくは言えないんだ。ごめんよ」

名刺の裏返す光斗。

裏側には、アドレスと『どんな地味な依頼も引き受けます！お気軽に！安いです！』と書かれていた。

疑念がさらに湧いた光斗。

琴子「ちなみに今、絶賛工作中だよ」

光斗「え！？麻婆豆腐注文するのが?!」

琴子「違う違う。(小声)ここのお客さんが問題なんだよ」

周囲を見回し、他の客を観察する光斗。

真剣みを帯びた顔つきになる。

光斗「早坂さん」

琴子「琴子でいいよ、堅苦しい」

光斗「ぐ・・・琴子、さん」

琴子「女性を名前で呼ぶのに慣れてないのか、距離取ってるのか、どっちだろうねえ」

光斗「距離取ってるわけじゃ・・・」

琴子「君、人を避けるけど本当は、寂しがり屋なタイプでしょ？」

言葉が出ない光斗。

琴子「寂しがっていいんだよ。人肌が恋しくない人なんて、この世界にはいないさ」

光斗「・・・」

琴子「それで、何かな？」

光斗「あんたの仕事、手伝っていいか？その

：麻婆豆腐のお礼に」

琴子「お礼にお礼かあ。ふふ。面白い。で、どんな仕事か分かってるの？」

光斗「内容は分からない。でも、これから起きることは分かる」

琴子「…未来でも視えたのかな。それで、今から何が起きるんだい？」

光斗「今じゃない。あと3分後。それとそうだな…念の為に3分後、何が起こつても迷わず、手元のグラスの水を、僕の斜め後ろに撒いてくれ。なるべく高い位置に」

琴子「床が濡れちゃうじゃないか」

光斗「構わない。その時は僕が店主に、得意技の土下座を披露する」

琴子「なぜ得意技になったのかは、敢えて聞かないでおくよ」

グラスに水を注ぎ、満たす琴子。

同・3分後

腕時計を見る琴子。

琴子「そろそろ時間だねえ」

挙手する光斗。

光斗「すいません。卵スープと五目チャーハン下さい」

店主2「はいよ。少々お待ちください」

別の客の注文の調理している店主達。
さらに慌ただしく調理の手を早める。

客「…よし、今だ」

店主達の様子を見つつ、一人の客が急に席を立ち出入り口に走る客。

客「(小声)ごちそうさま」

琴子「ほいっと」

光斗の指定した位置に水を撒く琴子。
水は客の顔面に当たる。

客「ぬあつ！」

水を顔に被り、勢いが緩む客。

光斗「よつと」

足を横に伸ばす光斗。

客は光斗の足に引っ掛かり盛大にこける。

琴子「おおく！なるほどねえ。こういう結果になったかあ」

光斗「感心してないで抑えるの手伝ってくれ！あと、少し水かかったぞ！」

転んだ客の足を、素人ながら懸命に抑える光斗。頭がやや濡れている。

琴子「うくん。力仕事はそんなに得意じゃないんだよねえ。：代わりに」

席を立ち、出入り口に向かう琴子。

手動のドアの鍵を掛ける琴子。

琴子「はい。そこまで」

客「な・・・くっ・・・うう」

逃げ道は失ったと悟り、抵抗を止め大
人しくなる客。

琴子「すいませくん。警察に電話を。無銭飲

食の常習犯を捕まえた、と伝えて下さい」

店主1「え、ああはい！」

スマホを出して通報する店主1

都会・夕方

古い師業の場所に戻って来た光斗と琴
子。

光斗は店仕舞いをしている。

琴子「あのお店の店主さん：若い方の人から
依頼があつてね。最近食い逃げの常習犯が
いて困っている。捕まえて欲しい、て内容
でね。お客さんが多い時、二人共調理です
ぐ手が離せない時、とタイミングを狙って
たらしくてね」

光斗「あの店、ぼろいけど味は良かったから
な」

琴子「店主の二人は、年齢や接客や調理やら
で、追いかけるのは難しい。そこで私に依
頼という訳さ」

光斗「ま、無事に依頼達成だな」

琴子「今回はいい協力者がいて、私も助かつ
たよお」

照れ顔で荷物を纏め終える光斗。

琴子「君の未来視ってやつ、なかなかいい代
物だねえ」

光斗「そりやどうも。またのご利用お待ちしております」

琴子「その未来視について分かったことを言ってもいいかい？」

光斗「ほう。どうぞ」

琴子「君の見える未来は『絶対に変えられない未来』ではなく『変えることのできる未来』なんだろう？私が助けられたのがいい証拠だ。『絶対に変えられない未来』だったら、私はバイクに轢かれていたか、下水に落ちていただろうねえ。改めて、ありがとう」

光斗「どういたしまして。それと正解だ。・・・」

一つ、訊いてもいいか？」

琴子「ん？何かな？」

光斗「僕のことを『我慢強い』で言ったな。

どういう意味だ？」

(回想) 中華料理屋

琴子が自分の麻婆豆腐を、光斗に与え

た際に言った一言。

都会・現在

琴子「あくアレかい。いやなに、未来が視えてしまうというのは、良い事だけじゃなく、辛い、悲しい事も多く経験したんじゃないかなと思ってね。君自身が周りからも、ね」

目を見開いて硬直する光斗。

(過去) 学校の教室

少年光斗の席の周りには、多くのクラスメイトがいた。

男子「なあ光斗！明後日の俺、サッカーの試合で活躍してるか？」

女子「今日の放課後：わたし、告白の返事を聞くんだけど、どうなってる？」

光斗(現在) M「皆、自分の未来が気になる。

僕は未来がわかる。だから自然と僕の周りには、人が集まっていた。そして僕はご要

望通り、視えた未来を伝えた」

男子「は？ベンチで座ってるだけ？」

女子「え、相手は来ない？：なんで？」

光斗（同）M「どうして明るい未来しか予想してないんだ？：せめて、どんな結果であろうと、受け入れる覚悟を決めていていなかったのか、なんて当時は思った。やがて、周りの僕への当たりは変わっていった」

男子「おい、こっち見るなよ！」

女子「あのさ、あまりみないで：気持ち悪い」

光斗の席の周りには、誰も居なくなつた。

光斗（同）M「皆、未来を変えようと思わないのか？と何度も思った。どうして非難されなきゃならないんだ。僕はただ：未来を教えるて頼まれ、伝えただけなのに：」

暗転。

現在

琴子「まあ、想像することしかできないけど、君には君なりに、辛い思いをしたんじゃないかな？：お金以外で。だから『我慢強い君』と言ったのさ」

少しだけ瞳が潤む光斗。

光斗M「やば、泣きそう。占われる側の人を世間はよく擁護するけど、占う側の気持ちを考えてくれた人は、何人いるだろうか？少なくとも僕は、一人もそんな人と出会ったことがない」

琴子「他人の残念な未来を視て、それを伝えるのは、辛いだろうさ。そして文句を言われるんだ。：世知辛いねえ」

光斗M「こちら側の気持ちを汲み取ってくれる人に、初めて出会えた：。どうしよう。泣きそうだ」

光斗「そうだな。じゃあ、今度こそさよならだ」

その場を去ろうと、一歩踏み出す光斗。

琴子「そういえば、君は今、ちゃんと屋根の

ある所で寝ているのかい？」

一歩で足が止まる光斗。

その顔からは心の熱は一気に冷めていた。

光斗「まあ：適当にいい所を探すよ」

琴子「あ。ネットカフェはお勧めしないよ。

慣れている人じゃないと、疲れ増すよ？」

凶星を突かれ、固まる光斗。

琴子「はあ、仕方ないなあ」

光斗の手を取り、どこかへ連れて行く
琴子。

抵抗することなく連れて行かれる光斗。

光斗「！？」

その時、断片的に未来が一瞬視えた。
夜、ソファで寝ている自分の姿。

光斗M「：ソファで？ どうして？ どの？」

建物の前・夕方

三階建ての古い建物の前。

二階の窓には『リーズナブル探偵事務
所』と書かれている。

光斗「本当に探偵だったんだ！！？」

琴子「やっと信じてもらえたかい？」

光斗「今更だが、何なんだ『リーズナブル探
偵』て」

琴子「よくぞ聞いてくれた！」

大袈裟な動きを交えて説明する琴子。

琴子「探偵に頼りたい。でもこんな地味な依頼を引き受けてくれるだろうか？そもそもお金がかかりそう。：なんて悩みを抱えている人の為に！安くてどんな地味な依頼でも引き受ける探偵事務所！それがここさ！！」

光斗「ここはブロードウェイじゃないんだから動きはいらぬ！！通行人の目を気にしてくれ！」

横目で二人を見る通行人達。

琴子「そうかい？動きを交えて説明した方が伝わりやすいと思ったのだけど」

光斗「視覚からの情報量が多くて、危うく内容が入らないとこだったぞ」

琴子「まあ、立ち話もなんだし、中に入りたまえ」

二階屋内

琴子が扉を開け、招き入れる。

琴子「さあどうぞ」

木製の仕事机やソファ、ローテーブルにスチール棚といった、いかにも事務所らしいセットだった。ソファに目がいく光斗。

光斗M「あれ？未来視で僕が寝ていたソファ、こんな感じのヤツだったな」

事務所の真ん中で両腕を広げる琴子。

琴子「ようこそ！私の自宅兼事務所へ！今日はここに泊まっていきたまえ！」

少し間を置いてはっとする光斗。

見るからに動揺している。

光斗「今、なんて、だって、あんた、えくと」

琴子「落ち着きたまえ。泊まっていきなさい

と言ったんだよ」

光斗「でもここ、あんたの家でもあるんだろ？」

琴子「そうだよ。あくでも、君は事務所スペ

ースで寝てくれないかい？」

光斗「それはいいけど…その…」

琴子「私は君が、夜這いする人間には見えな

いけどなあ」

光斗「し、しない！！…でも、今日会ったば

りの男を泊めるのって…不純な感じが」

琴子「ふむ。君、もしかして素で女性慣れし

てないのかな？よく占い師なんて客商売で

きるねえ」

光斗「そんなことはない！平気だ」

琴子「ほう。じゃあ、私の目を普通にみて

「ごらん」

目を合わせる琴子と光斗。

秒で目を逸らす光斗。その顔はやや赤い。

悪戯っぽく笑う琴子。

琴子「君はなんというか、微笑ましいねえ」

光斗「・・・やかましい」

琴子「なくに。寝首を搔かれたら、私に見る目が無かっただけさ」

光斗「肝が据わり過ぎだろ、あんた」

同・夜

毛布を光斗に手渡す琴子。

琴子「はい毛布。枕代わりにレッドキングと

ジャミラのクッション、どっちがいい？」

光斗「毛布だけでいい。というか、なんで怪

獣のクッションしかないんだ！？」

琴子「メフィラス星人だけは貸せないんだ。

ごめんよ」

光斗「いらんわ」

琴子「それじゃあ、おやすみ」

事務所スペースを去ろうとした琴子が

足を止め、振り返る。微笑んでいるが、

目はやや真剣みを帯びている。

琴子「ところで、明日予定あるかい？占いで

外で」

光斗「残念なくらい無い」

琴子「そっか。なら、明日も協力してくれな

いかな？ちゃんと謝礼も出すから」

光斗「まあ…いいけど」

琴子「それと、出来ればなんだけど・・・」

目を逸らし、次の言葉が出てこない琴

子。

琴子「ううん、いいや。じゃあ、今度こそおやすみ」

今度こそ事務所スペースを去る琴子。
歯切れの悪さに違和感を抱く光斗。
考えても仕方なし、という様に寝る事にする。

同・深夜

消灯し暗くなった事務所スペース。
ソファに寝ころび、毛布にくるまる光斗。

光斗「…なるほど。こういう成り行きで寝るのか。…やっぱりこのソファだったか」

光斗M「今日は慌ただしかったなあ。…でも、嫌な気分ではない」

光斗「…楽しかったのか？」

今日の出来事を思い返す。

光斗M「今日のことは全部知っていたわけ
はない。大体だ。それでも、いつもみたい
に『退屈』な想いはしなかった。むしろ新
鮮気分だった」

胸に手を当てる光斗。

光斗「…わかっていた未来だけど、楽しめた
ってことか？」

光斗M「あの人と一緒になら、退屈しないで済
むのか？」

右目に意識を集中して、明日の午後を
未来視で視る。

断片的に視えた。

依頼を聞いている様子の、光斗と琴子。
続いて、ひきつった顔の光斗が視えた。

光斗「やれやれ。何を依頼されたのやら」

言いつつ、顔は微笑んでいた。

光斗 M 「明日が楽しみ、なんて思ったの、いつ以来だ？・・・よし」

何か決意して、眠りについた光斗。

同・朝

朝日が窓から差し込んで、瞼を開ける
光斗。もう少し眠ろうと体の向きを変
える。

琴子 「あ。起きちゃった」

スマホを構えた琴子が目の前にいた。

光斗 「何しとるん？」

琴子 「あまりにいい寝顔だったので、動画と
写真を撮っとるや」

笑顔で答える琴子。

眠気が一気に飛び、スマホを奪い取る

うとする光斗。

しかし躲される。

光斗「この盗撮魔！」

琴子「はは。安心したまえ。手ブレ補正して

ちゃんと撮影したよ。さあ、朝ごはんにし

よう！」

光斗「そういう問題じゃ…というか、急に朝

食の話か！？内容の方向転換すごいな！？」

琴子「パンと粒(つぶ)すけ、どっちがいい？」

光斗「え、待ってくれ。粒すけて何だ？」

琴子「千葉県産のお米で、2020年に開発

された品種だよ。粘りと弾力が特徴さ」

光斗「へえ…て、普通に米って言えばいい

じゃないか！」

琴子「ちなみに、常連さんに千葉で米農家を

やっている人がいてね。その人に分けても

らったんだよ」

光斗「常連に米農家：まさか依頼で「千葉に行って米の収穫を手伝う」とかあったのか？」

琴子「あく惜しい。収穫じゃなくて田植えを手伝ったのさ」

光斗「本当に地味な依頼でも引き受けるんだな！？ここ探偵事務所だろ？」

琴子「来るもの拒まず、さ」

光斗「もういつそ探偵事務所じゃなく「何でも屋」に改名したらどうだ？」

琴子「あくよく依頼人から言われるよ」

光斗「言われてるのかよ！しかも依頼人から！」

琴子「さあさあ、茶番はここまでにして食べようじゃないか。炊き立ての粒すけが冷めてしまう前に」

事務所スペースからスチール棚の向こう側、私生活スペースに移動していつ

た琴子。

やれやれ、といった感じでソファから腰を上げる。

そこで、はっと気づく。

光斗「って！もう粒すけと決まっているじゃないか！何だったんださっきの質問は？」

棚の向こうから琴子の悪戯っぽい笑い声が聞こえてくる。

探偵事務所（私生活スペース）

食卓もとい一つしかないテーブルの上には二人分の朝食が並んでいた。

サラダとコーンポタージュ、茶碗に盛られたチャーハン。

光斗「和洋折衷の域を超えてるな！？こんな

異文化交流の朝食初めてだよ」

琴子「目玉焼きにしようと思ったのだけど、

卵が一個しかなくてねえ。お皿も丁度い
のがなくて。あ、ちゃんと米がパラパラし
たチャーハンだから。粘っこいのはあまり
好みじゃないんだ」

光斗M「粒すけよ。お前の魅力はもう弾力し
か残ってないのか…」

米に憐れみを感じた光斗。

光斗「っ・・・」

一瞬動きが止まった光斗だが、何事も
無かった様に。

光斗「まあ、折角だから頂くか」

座って異文化交流の朝食を食べ始める
光斗。

同・数分後

食べながら考え事をする光斗。

光斗M「さて参ったな。起きてからずっとこの人のペースに振り回されてるなあ。…いつ昨日決めたのを伝えようかな」

琴子「……」

沈黙の食卓。

食事の進みが徐々にゆっくりとなる光斗。

光斗をしばらく観察する琴子。

やがて…

琴子「もしかして今、考え事してる？…というより、私に何か言いたいことある？」

光斗「っ！なんでわかったんだ？」

琴子「視線が下に泳いでる。少しうつむいて額に手を当てている」

自分の姿勢に気付く光斗。姿勢を直す

が、視線は下を向いたまま。

光斗M「行動心理か？だてに探偵と名乗ってないか。：まあ、確かに言いたいことはあるんだけど」

意を決し、視線が真っ直になる光斗。

光斗「どうか僕を、助手にしてください！雑用係でもいい。とにかく手伝わせて下さい！お願いします！」

琴子「いいよ」

即答した琴子。

間。

返答内容は理解したが、気持ちを追いついていない様子の光斗。

そんな光斗などお構いなしに話す琴子。

琴子「安くて地味な依頼でもオツケーなだけ

あつて、意外と忙しいんだよ。人手が欲しくてまさに昨日、私から誘おうとしたんだ」

光斗M「昨日の歯切れの悪さはそういうことか……」

琴子「あと君、未来が視えるんだろ？実は私はこれでも……」

言いながら、手元のマグカップを手に取る琴子。

持ち上げた瞬間、取っ手の部分が外れ、本体が落下する。

本体がテーブルに着地する寸前で、光斗がキャッチする。

琴子「はは、ありがと。それでも不幸体質なんだよお。君の未来視は有難い」

光斗「ついさつき、カップが割れてコーヒーを被るのが視えたんで……」

(回想) 数分前

粒すけを憐れむ光斗。

光斗M「まあ、ついさっきと言っても、粒すけを憐れんでいた時だが」

現在

カップ本体をテーブルに置く光斗。

熱かったので、受け止めた手をひらひらと振る。

琴子「はあ。新しいの買わないとなあ」

光斗「なあ、助手に認定してくれたのは有難いけど、その、理由とか聞かないのか？」

琴子「えく志望動機とかそんな面接みたいなこと聞かないよ。堅苦しい。来るもの拒まらず、て言ったでしょ？」

光斗「ああ…」

琴子「あと『地球を中心に宇宙が回っている』
というのもモットーさ」

光斗「なんで天動説なんだよ！？」

悪戯っぽく笑う琴子。冗談らしい。

琴子「そうそう、占い業は建物の前でやっても構わないよ・・・店構えは変えようね」

光斗「・・・了解」

調子狂う感じだったが受け入れてもらえたようで、安堵の息を吐く。

光斗M「これから『退屈』よりも『楽しい』が増えるといいな。ちよつと大変だろうけど」

琴子「一つお願いがあるんだけど」

光斗「ん？」

琴子「言葉遣いは大目に見るとして、私のことは名前で呼んでくれないかい？教えたのに殆ど呼んでないじゃないか」

光斗「っ・・・わかった・・・琴子、さん」

琴子「うくん。今はそれでいいか。…ふふ、

本当に君は微笑ましいねえ」

光斗「くくくくく！」

ニヤニヤ笑う琴子。

赤面する光斗。

光斗M「：うん。後悔はしたくないなあ」

光斗「ところで、今日も何か依頼をこなすのか？」

琴子「いいや。依頼人が今日の午後に来るんだよ。内容はその時まで謎だよ」

光斗「そうか。ちなみにどんな依頼人が来るんだ？」

琴子「千葉県で米農家をやっている人らしいんだけど」

光斗「依頼内容は田植えじゃないだろうな?!」

(第一話・完)